

序文

新さくす

一九四五八月十日、午前十時十五分、日
 本の空襲は世界最初のうらニエうらニ三五爆
 弾が、アメリカ軍機によつて投下され、ついで
 て九日、長崎にポルトニウムの爆弾が投下され
 、空襲は二十四万七千の生命の奪われ、長
 崎では十五万前後の人々が死にました。

軍事的には、そののみで勝敗を決しうるよ

うな決定的兵器ではないといわれ、原子
 爆弾が、なぜこのように悲惨な現実を呼びお
 こしたのか、たうか。

一九四五冬の暮れ、夏にかけて、日中の
 都市が夜毎に焼きつくされた。戦争の恐怖の前
 線、空襲は衰えを生ずるのようになつてい
 けなう。

今夜こそ終い、今夜こそ焼かれる、とい
 う。噂や、空襲は焼かずに上流の列を切つたお
 し流すのなと、いふような噂が流れた。

川つゆいながら。

操縦者ホール、テイクオフ大統の語子よう

に全乗員が黒眼鏡をつけ美人並の恥辱である

原子爆弾一号をよせ、観測機を飛ばし、銃之を三

機の飛行機の高々より侵入し、あつた。

とを誰か知り得た。

よして今迄の世に清くたゞと安堵した人々

が家に帰つて急いで朝食を済まし、出勤者は

職場へ、学生、生徒は学校へ、作業場へ、同

辺町おや郡部あらの善勇隊は市の中心部へ、

みる一日の行動を開始した時、これはまじで狂

計ではあつたように思ふが、おの市民が、街

路の市場や棄物の溢れ、時刻があつた。

は、あつた。

は、あつた。

は、あつた。

は、あつた。

は、あつた。

は、あつた。

は、あつた。

は、あつた。

アメリカ

主婦と子供で守る商店街であった。

此の難多のような商店の中心部。この建

物ねらわれたい時、商店はどんな表情を

りてたかろうか。

爆心直下の中央郵便局では丁寧な勤と日勤

者との交際時間でも六時間の全局員が古めあ

練瓦造りの建物内に立満し、一人の老い使の

みかま南のきの塵湯をこみと捨てに出る

ところがあった。

七、八百米東北方にはなれを陳兵場では丁

高りの朝入隊した。再会の旅者も中年の病

た兵が軍服をつけて軽装列し、足送り

の強さを立て、また名残りを惜しんで

たつた。

千五米はなれを留守では、防空直道二百名

順命し他の庁員が出勤し、勤員は銃の

たか掃除機を動かして廊下を歩

き。

千五百米の市役所裏から雑

かかれば、學立高せ、學立一中、市立二

女学校高女、女子高等、より他の学校より、
 二年生か教師に引率されて疎開家庭の女と片
 はけいとりか、うついでところ。また土橋町
 あたりでは、あなれば、おあひま配給停止と脅かす
 れてあつまた子と替りつたおあひま棚や、松根堀り
 に目をくらす郡部か、う出難してまた義勇隊の
 百姓たちも、同じ仕りか、うと汗を
 ふりこりとすたつた。
 二千米はるれた横川町の狭い商店街は、都
 外より市内への勤する人で埋まり、三千米は
 ちれた所々の家庭では、留守居、年より女子
 供たちの朝食、あは仕末にせりか、うとして
 いる。
 ありような女中。戦争末期の不守りな
 かで、常に天皇をかしくとす、権力者たち
 意のままに、父や夫や息子をさし出し、か
 かり金も、あつゆゑ、財産をばや捨て、ほろ
 まとい、大豆をかぎり、野草をたべながら、
 つてまた国民か、より愚かなほかに、苦への表
 情を八月の青空にためつて、曝していた、あ、

中(字)

く、ようなとき。

WNTニ万トニ爆撃より強力な、グラニ

・スライムニ千倍以上の爆破力を有する。 ~~アメリカ~~

大銃砲かいめんをかすく「セルカ」と呼ぶ

る如く由八月六日 ~~に~~投下した直後、声明で、

「太陽の力の源泉となる勢力」と誇った ~~が~~

「エニギハヒ」の表情の ~~上~~ 五百米のそこ

ろで突然放射されたのである。

此の ~~新~~ 子供たち、詩の仲間、ポカマと光

つた、という印象を ~~多く~~ 持つ、そのおぼえてい

る如く、人々、様々な色彩に感じ、 ~~その~~ 強

い印象を ~~瞬間~~ 刻 ~~ま~~ ~~り~~ ~~た~~ ~~り~~ ~~の~~ 光りは、 ~~その~~ 瞬

直視して、すべりの人の視力を奪い、 ~~その~~ 瞬

か、 ~~その~~ 束刻は始つたのである。

中央郵便局は、まもなく、衝動を感上、 ~~その~~ 活

つ、瞬時に倒壊し、一人だけ、お日ねまで生

つ、 ~~その~~ 老い、 ~~その~~ 全身、即死、 ~~その~~ 練兵場の

一隊は、全部、赤十字、 ~~その~~ 変化、 ~~その~~ 散乱し、

學府、 ~~その~~ 圧殺を、 ~~その~~ ため、 ~~その~~ 人々、 ~~その~~ 海岸、 ~~その~~ 遠い、

つ、 ~~その~~ まい、 ~~その~~ とき、 ~~その~~ 万代、 ~~その~~ 橋、 ~~その~~ 西詰、 ~~その~~ 三日

つ、 ~~その~~ まい、 ~~その~~ とき、 ~~その~~ 万代、 ~~その~~ 橋、 ~~その~~ 西詰、 ~~その~~ 三日

されたりしくその消息を詳しく知るすべし
ハ。

商店街の埋めつくし出勤者の列はまよ

今迄

の肉を食して顔面から両腕を焼かれ、
方向を逆にかえて郭外の方へよると排れ

きり。

宗座の忠告も同じこと。倒壊した家屋

の向かい、火のまわったまて助牛を扱

りついにけられ去り、どういふおまめ

の詩えついにけられ去り下り「熱いよ

これらのお世帯の記憶が、
日かあるうか。

こいつらお急ぎはわめて炎の海に

熱いのはお世帯を起し、
山脈にふくとお虹お懸つて、
やかて夜。

市の近辺の村々、
人々でさん満し、
水をおめお

ちの折り重つて、
ちの折り重つて、
誰とも命を

んでいつか、
三日、
四日、
五日、
一週

たつて、
人々か死んで、
いつか、
あ

たつて、
人々か死んで、
いつか、
あ

たつて、
人々か死んで、
いつか、
あ

たつて、
人々か死んで、
いつか、
あ

たつて、
人々か死んで、
いつか、
あ

の今まわつた力や厚燻病で倒れる力のさ
 身辺におえることか外来る恐怖、しかも當時
 燻病地を二料以内の婦人の体に老人又は少
 女のよがる生理病状を起させた(朝野新聞)一
 一・二〇)放射能の作用か、遺傳的な悪影響
 を今の永環的い年月にわたつて与えられた
 科学者の説か報じられたまうては、一併、
 いうすまはまいてあつう。よして、よれうは
 すんで治療の方法あるくよの見通しをえたい
 としむる。然れ此の世界に原子燻病の製造は
 着々とついにやられ、よれを便用せんとす意
 志が常に機会をねらつていよと一たういふ
 あつうか。
 一九四五、ドイツの降伏後三ヶ月でソ
 エートが申す^{考案する}ときまつたヤルウ会議のニ
 月の終り、四月一日米軍は沖縄に上陸、同五
 日小磯内閣は退陣、同日モロトフ外相が日ソ
 不可得條約の不延期を通告して来た。
 五月八日ドイツはソ連の攻撃降伏したの
 にか、その前にカニ戦線が形成をおくうせつ

このまゝな情勢の中、何故原爆を使用す
 るな~~る~~連合国主催の実験で、その偉力を示し、
 その基礎を立って日本に最後通牒を告し、責
 任の負担を日本人自身にゆだねるべきか、
 とアメリカの官談が叫び、日本の子供たちを
 何故あんなに落とすのか、という世あつた
 う沙汰にあつた。と責められた。
 身内し原爆投下の目的が口をアの答へる
 日本を叩きつゝ、おすこと、あつた。と、
 一、マシカズニズ、トマス・ケ・フリン
 一、一九四六、六、一五、土曜文芸評論
 のようなることは、時間的にも考へられ
 られた。
 一、又つた。又つた。又つた。又つた。
 一、副会長加、ニツツの言明を、M・S
 一、フランクツト、要約した。次の言明である。
 一、広島と長崎に、いかに爆弾が投下されたか
 とは、その政治的なる目的が、充分に達せられた
 といふ意味では、一つの成功である。

アメリカの良心ある人々

あつた。日本もさうするアメリカの管理は定
ておけるものであり、はとアとりの権力あり
といはれこれにはない。L

このして八月六日、広島を中心、住民地区
の上にも、来るだけ大量の人命の頭上に原丹
爆弾は投下せられた。市の周りに
あゝ三菱造船、全電工、旭兵器、日本製鋼、
東洋工業、油谷重工、神原商店、兵器廠などの
軍需工場は殆んど損害をうけず、工員も九四
%は健在であつた。国鉄は三日以内で機能を回

復した。

(石井中將の)

八月九日、ソビエト軍の戦車隊が細菌兵
器の根據地ハルビン郊外を去り、七三一部隊が
けつ殺到して、大朝、午前十一時に長崎の町
はがれ、医科大学と養正醫院、天守堂の崩上
空、^文厚焼油を号め投下された。
八月十四日、日本、^村ポツダム宣言を受諾
し、終戦の詔勅が下された。その中で天皇は
「加之敵ハ新ニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ類ニ
シテ無算ヲ殺傷シ慘害ノ及ブ所莫ニ測ルヘカラザ

中国ニ〇・一八・一五）「今約七〇年は模範如
 一 戦争記念物高島、長崎の壕壕」――「五
 日ニ〇・一八・二四）「死者をおもひ出」――「朝
 日ニ〇・一八・三一）等の文字は、明白は自分
 の筆が抜けはじめのり下はありかと鞆く衣急
 の生方者り上ん一層の恐怖を与之ると云ん。
 平おのたけり様性たといいう彌都布宣候とあ
 まつて勤皇を發揮したし。家諱を失つた人々
 はそれをもつて諦めようとした。――「諦め」の
 ぬに徳宗のたぬとカトリツクが長崎の彌都布宣
 ぬに徳宗のたぬとカトリツクが長崎の彌都布宣
 つたういか）
 あの日死屍で充満した河川は青く澄んだ水
 を流し、青丈けより高く生い茂つた鉄道草
 の間には、ツクツクと建ち並ぶ木が、戦争の悲惨の
 ぬにぬけ、牛さねたま、這い上るうとわか、市
 民のぬけ、井井二年たつて臨幸した天皇、
 たぬの復讐のあとをみる満足に思ひしと慰め

このまゝの原爆の惨状をいかに伝えるか

うらな ~~生~~ 生治 ~~中~~ 中の ~~集~~ 集を ~~心~~ 心く 原爆の 苦悩は

「ヒカドニ 者と 呼ばれ 泣くやと おまんす

と」といふ ~~少年~~ 少年 席の上は、 母を恋いつ、せ中生

治をすま 少女 ~~さん~~ さん 上は、 4口 ~~い~~ いら 悩みつ

、 歳長 ~~一~~ 一人 上は、 あり ~~い~~ いら 顔面 ~~の~~ の 傷を

した 夫婦、 再婚 ~~す~~ す まえ人と その 子の 向に、

あ ~~ら~~ ら ゆる 原爆 ~~ん~~ によつて 歪みと 不登 ~~り~~ り 労苦 ~~を~~ を

ける ~~市~~ 市 ~~民~~ 民 たち ~~ん~~ んとつては、 爆心 ~~地~~ 地の 平和 ~~塔~~ 塔の

前 ~~で~~ 鏡 ~~を~~ 鳴らし 花火 ~~を~~ 打ち ~~上~~ 上 ~~が~~ が ~~裁~~ 裁 ~~量~~ 量 ~~の~~ の

ス・セ ~~口~~ 口 ~~に~~ に ~~マ~~ マ ~~の~~ の 長崎 ~~の~~ の 土 ~~を~~ を は ~~ら~~ ら ~~し~~ し ~~と~~ と ぶり ~~か~~ か

け ~~た~~ たり ~~す~~ す 式典 ~~や~~ や、 踊り ~~の~~ の 競演 ~~の~~ の 偽装 ~~行~~ 行列 ~~の~~ の

平和 ~~条~~ 条 ~~約~~ 約 ~~の~~ の 苦言 ~~を~~ を 耳 ~~に~~ に ~~か~~ か ~~か~~ か ~~は~~ は 世 ~~環~~ 環

の 駭 ~~き~~ き ~~て~~ て ~~あ~~ あ ~~つ~~ つ ~~を~~ を

「 ~~高~~ 高 ~~平~~ 平 ~~知~~ 知 ~~記~~ 記 ~~念~~ 念 ~~都~~ 都 ~~市~~ 市 ~~建~~ 建 ~~設~~ 設 ~~法~~ 法 ~~案~~ 案 ~~の~~ の 議 ~~会~~ 会 ~~開~~ 開 ~~閉~~ 閉 ~~式~~ 式、

「 ~~モ~~ モ ~~ア~~ ア ~~レ~~ レ ~~・~~ ・ ~~ヒ~~ ヒ ~~口~~ 口 ~~に~~ に ~~マ~~ マ ~~ズ~~ ズ ~~の~~ の 舞 ~~高~~ 高 ~~ら~~ ら ~~お~~ お 呼 ~~心~~ 心 ~~を~~ を

と ~~れ~~ ら ~~か~~ か ~~果~~ 果 ~~し~~ し ~~こ~~ こ ~~い~~ い ~~だ~~ だけ ~~お~~ お ~~屏~~ 屏 ~~の~~ の ~~人~~ 人 ~~々~~ 々 ~~は~~ は 原 ~~爆~~ 爆 ~~の~~ の

苦 ~~悩~~ 悩 ~~を~~ を 軽減 ~~し~~ し ~~て~~ て ~~く~~ くれ ~~知~~ 知 ~~力~~ 力 ~~を~~ を ~~な~~ な ~~つ~~ つ ~~た~~ た ~~ら~~ ら ~~う~~ う ~~か~~ か

原 ~~子~~ 子 ~~爆~~ 爆 ~~弾~~ 弾 ~~に~~ に ~~対~~ 対 ~~す~~ す ~~る~~ る 威 ~~嚇~~ 嚇 ~~と~~ と 義 ~~比~~ 比 ~~の~~ の 舉 ~~動~~ 動 ~~を~~ を ~~中~~ 中 ~~で~~ で

長 ~~崎~~ 崎 ~~の~~ の 鏡 ~~が~~ が ~~も~~ も ~~て~~ て ~~は~~ は ~~や~~ や ~~さ~~ さ ~~れ~~ れ、 孤 ~~児~~ 児 ~~か~~ か ~~ら~~ ら ~~生~~ 生 ~~れ~~ れ ~~た~~ た ~~五~~ 五

ソウエートの原爆所有の
明らかに
なされ、

あんな

得降停約の行政協定は再軍備を約束し
 八分は三十三万陸軍を持つと約束した
 ね力者もその日青年たちは手に
 銃を持つたされし。国民は再軍備の志
 情の中実き落されようとして
 今、七分は八月六日か
 来て、雲の燃え子青空に熱気の中
 下アルトル雑草の燃えの
 の日の記憶は強く
 長崎の、いれ厚燦照
 下された日人とし
 物たちにはもうその意味する偽物的な
 中でのかくとけはし
 物をちか、あの炎のしみつ
 の血と涙にまみれた心で、今はもう
 して、いる。厚燦照が誰か
 んよつて誰の上へ落され、そのこと
 上へ何を意味するか、私たちが
 かに討決した4人は、おぬかを
 と南うこと、そのおぬが、生きた
 と、いこと。

国甲し

一九三三

は

原爆の子たち A・B・C (原爆被害調

査委員会) 被害の調査研究のみをして治療

をせぬことには耐し自命をすゝんで治療計画を

たてようとし、尊厳の戦犯慰問させられた

Yロイドの少女たちが意時にめざめ、原

爆障害者や子供を笑つた未亡人たちが、職場

の労働者や学生たちと結んで平和の運動に起

ち上ろうと、いさよる中から、子供たち

は、あの肉災の恐怖をこえて遠向から原爆被

害、知る声をはり上げ、大人たちは

炎の苦肉をありこえて平和を叫び、此の詩

集にあがら

戦争をしかける者が四割せられぬのは、あ

以上、原爆被害をくす

中、悲惨を承知の上で、これを実行したものは

必死にも四割せられぬは、あるまじい。

流す血はつぐむあぬは、あゝ、灼す

ついに、涙はぬぐふべきだ、どうあつても、詩集

あつたために大きな錠りをもつたうに。

一九五二、八、六

三十一 三 十